

## 『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

### 平成 23 年度派遣報告書

—インド・発展社会研究所、タミル語、派遣期間(H23. 7. 1-H23. 10. 1)—

平成 23 年度入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程 1 回生

阿部麻美

#### 自身の研究テーマについて

本研究のテーマは「現代タミル社会におけるダリト(いわゆる「不可触民」)のキリスト教改宗」であり、2つの目的を有する。ひとつは、現代の文脈の中で、近代とは異なるダリトのヒन्दゥー教からキリスト教への改宗の背景を探ることであり、もうひとつは、そうしたダリトの改宗行動が社会にどのような影響を与えうるのか、といった改宗の意義を考察することである。

ダリトのキリスト教改宗を扱った研究の多くは、欧米の宣教師に信仰に変化をもたらす主体としての地位を与え、ダリトを客体として論じる。そうした理解の枠組みにおいて、ダリトのキリスト教改宗はカースト差別から逃れるため、もしくは、ミSSIONナリーが呈する教育を得るためと一元的に理解されてきた。しかし、ダリトを取り囲む現実が大きく変化した現代タミル社会という文脈の中で、これまでの枠組みでは、現代における改宗を理解することはできない。主な生業であった農業日雇い労働の減少、労働移動、都市とのつながりの増大、中央・州両政府による開発政策、メディアの普及、格差拡大など、それらは相互に繋がり合いながら、ダリトの日常生活を現代に位置づけている。

従来の認識を問い直すとともに、内面的な改変としてだけの改宗の理解を越え、社会の現状や政治の主流に対してダリトの改宗はどのような意味を持ちうるのかについて考察して行きたい。



図 1(左)

農村における  
洗礼の様子



図 2(右)

チェンナイのペンテコステ派メ  
ガチャーチには  
毎週 1 万 5 千名  
ほどが集まる。

#### 研修言語の概要

研修言語であるタミル語は、ドラヴィダ語族に分類され、ヒンディー語をはじめとするインド・アーリア語族とは異なる言語体系である。現代タミル社会で用いられるタミル語

には、口語タミル語と文語タミル語が存在し、日常会話には口語が、演説やニュースなどには文語が用いられる。これら2つのタミル語の間には、文法語尾や用いられる語彙の乖離があり、また口語タミル語は地域によってその言い回しや単語の語意などに特色が現れる。

### 語学研修の内容について

研修前半2か月は、州都であるチェンナイに滞在し、大学の英語講師に個人授業を依頼してタミル語をタミル文字の書き方、その発音の段階から学んだ。講義は平日の午前の90分程度で、ホワイトボードや先生の用意するプリントを用いつつ、文語タミル語の文法の学習が中心に行われた。研修後半、最後の一か月はフィールドに場所を移し、4日程度ずつ5つの農村に滞在し、口語タミル語の実践訓練を積んだ。

前半2か月のうち一か月を基本的な文法の学習に充て、残りの一か月は、辞書を用いながら子供向けの簡単なタミル語の物語の翻訳や先生の出題する文法問題などで文法の定着を図りつつ、ワードバンクや質問票の作成などを行った。講義では、先生自らの経験を踏まえてタミル文化に関する話題やタミル歌謡が授業の中心となることもしばしばであり、言語だけに縛られないタミル文化に触れる機会を与えていただいた。

後半の一か月の農村滞在中は、日常会話のほとんどがタミル語であり、文法や発音の誤りに臆する間もなく、タミル語でコミュニケーションをとることが求められた。私が理解できるまで同じ内容を何度も説明し、私のつたないタミル語をなんとか理解しようと努めてくれる農村の人々の好意に後押しされ、口語タミル語を実践的な訓練のなかで学ぶことができた。



図3 授業風景

### 研修期間中に印象に残った体験や経験

州都であるチェンナイ滞在中の8月中旬夜、就寝しようと消灯し、数分がたったある時、けたたましい破裂音が屋外から聞こえてきた。なにごとかと、事態を把握したいという思いと、不安な思いとが交錯していたが、それはカトリックの信徒が聖母マリアの被昇天の祭日を祝うためのクラッカー音であった。彼らはカラフルな電飾で飾られたマリア像を担ぎながら市中の公道を行進する。正確な数は定かではないが、100名程がその行進に参加していた。インディアナイゼーションされたキリスト教の宗教実践が、インド第4の都市で行われていた。突発的にはあったが、目の当たりにすることができたこの行進は、直接すぐには自身のテーマには結びつかないかもしれないが、現地にいなければ知ることも見ることができなかった。



図4 聖母の被昇天祭

### 目標の達成度や反省点について

前半の2か月の間は、学んでいる文語タミル語を口語タミル語理解につなげることができず、思うように学習の時間が取れないことへの焦りが拍車をかけて語学力習得への不安を増大させ、学習の効率性や積極性を理想に乗せることができなかった点が悔やまれる。

しかし、ほぼタミル語中心の生活を送ることができた後半の一か月は、そうした不安を感じることもなく、積極的に口語タミル語を実践の中で学ぶことができ、調査に際しては不十分ではあるものの、簡単な日常会話や質問はできるようになった。今後の課題は、調査に十分な語学運用能力を身につけてゆくことである。

今回の助成でもって、日本では決して得ることのできない実践の機会を与えていただいたことに深く感謝しつつ、今後も精進して行きたい。